畑のへり

宮沢賢治

麻が刈られましたので、畑のへりに一列に植ゑられてゐたたうもろこしは、大へん立派に目立ってきました。

小さな虻（あぶ）だのべっ甲いろのすきとほった羽虫だのみんなかはるがはる来て挨拶（あいさつ）して行くのでした。

たうもろこしには、もう頂上にひらひらした穂が立ち、大きな縮れた葉のつけねには尖（とが）った青いさやができてゐました。

そして風にざわざわ鳴りました。

一疋（ぴき）の蛙（かへる）が刈った畑の向ふまで跳んで来て、いきなり、このたうもろこしの列を見て、びっくりして云（い）

ひました。
「おや、へんな動物が立ってゐるぞ。からだは瘠(や)せてひょろひょろだが、ちゃんと列を組んでゐる。ことによるとこれはカマジン国の兵隊だぞ。どれ、よく見てやらう。」
　そこで蛙は上等の遠めがねを出して眼(め)にあてました。そして大きくなったたうもろこしのかたちをちらっと見るや蛙はぎゃあと叫んで遠めがねも何もはふり出して一目散に遁(に)げだしました。
　蛙がちゃうど五百ばかりはねたときもう一ぴきの蛙がびっくりしてこっちを見てゐるのに会ひました。

「お〜い、どうしたい。いったい誰ににらまれたんだ。」

「どうしてどうして、全くもう大変だ。カマジン国の兵隊がたうとうやって来た。みんな二ひきか三びきぐらゐ幽霊をわきにかかへてる。その幽霊は歯が七十枚あるぞ。あの幽霊にかじられたら、もうとてもたまらんぜ。かあいさうに、麻はもうみんな食はれてしまった。みんなまっすぐな、いい若い者だったのになあ。ばりばり骨まで噛じられたとは本当に人ごとども思はれんなあ。」

「何かい、兵隊が幽霊をつれて来たのかい、そんなに

こはい幽霊かい。」
「どうしてどうしてまあ見るがいゝ。どの幽霊も青白い髪の毛がばしゃばしゃで歯が七十枚おまけに足から頭の方へ青いマントを六枚も着てゐる」
「いまどこにゐるんだ。」
「おまへのめがねで見るがいゝあすこだよ。麻ばたけの向ふ側さ。おれは眼鏡も何もすてて来たよ。」
あたらしい蛙は遠めがねを出して見ました。
「何だあれは幽霊でも何でもないぜ。あれはたうもろこしといふやつだ。おれは去年から知ってるよ。そんなに人が悪くない。わきに居るのは幽霊でない。みん

な立派な娘さんだよ。娘さんたちはみんな緑色のマントを着てるよ。」

「緑色のマントは着てゐるさ。しかしあんなマントの着様が一体あるもんかな。足から頭の方へ逆（さかさま）に着てゐるんだ。それにマントを六枚も重ねて着るなんて、聞いた事も見た事もない贅沢（ぜいたく）だ。おごりの頂上だ。」

「ははぁ、しかし世の中はさまざまだぜ。たとへば兎（うさぎ）なんと云ふものは耳が天までとゞいてゐる。そのさきは細くなって見えないくらゐだ。豚なんといふものは鼻がらっぱになってゐる。口の中にはとんぼのやうなすきとほった羽が十枚あるよ。また人といふもの

を知つてゐるかね。人といふものは頭の上の方に十六本の手がついてゐる。そんなこともあるんだ。それにたうもろこしの娘さんたちの長いつやつやした髪の毛は評判なもんだ。」

「よして呉れよ。七十枚の白い歯からつやつやした長い髪の毛がすぐ生えてゐるなんて考へても胸が悪くなる。」

「そんなことはない。まあもつとそばまで行つて見よう。おや。誰か行つたぞ。おいおい。あれがたつたいま云つたひとだ。ひとだ。あいつはほんたうにこはいもんだ。何をするかこゝへかくれて見てゐよう。そら、

ちょっと遠めがねを貸すから。」
「あゝ、よく見える。何だ手が十六本あるって。おれには五本ばかりしか見えないよ。あっ。あの幽霊をつかまへてるよ。」
「どれ貸してごらん、ああ、とってるとってる。みんながりがりとってるねえ。たうもろこしは恐(こは)がってみんな葉をざあざあうごかしてゐるよ。娘さんたちは髪の毛をふって泣いてゐる。ぼくならちゃんと十六本の手が見えるねえ。」
「どら、貸した。なるほど十六本かねえ、四本は大へん小さいなあ。あゝあとからまた一人来た。あれは女

の子だらうねえ。」
「どう、ちょっと、さうだよ。あれは女の子だよ。ほういまねえあの女の子がたうもろこしの娘さんの髪毛をむしってねえ、口へ入れてそらへ吹いたよ。するとそれがぱっと青白い火になって燃えあがったよ。」
「こっちへ来るとこはいなあ、」
「来ないよ。あゝ、もう行ってしまったよ。何か叫んでゐるやうだねえ。」
「歌ってるんだ。けれどもぼくたちよりはへただねえ。」
「へただ、ぼく少しうたってきかしてやらうかな。ぼ

くうたったらきっとびっくりしてこっちを向くねえ。」
「うたってごらん。こっちへ来たらその葉のかげにかくれよう。」
「い丶かい、うたふよ。ぎゅっくぎゅっく。」
「向かないよ。も少し高くうたってごらん。」
「どうもつかれて声が出ないよ。ぎゅっく。もうよさう。」
「よすかねえ。行ってしまった残念だなあ。」
「ぼくは遠めがねをとってくる。ぢやさよなら。」
「さよなら。」
二ひきの蛙（かへる）は別れました。

たうもろこしはさやをなくして大変さびしくなりました。がやっぱり穂をひらひら空にうごかしてゐました。

底本：「新修宮沢賢治全集　第十一巻」筑摩書房
１９７９（昭和54）年11月15日初版第1刷発行
１９８３（昭和58）年12月20日初版第5刷発行
入力：林　幸雄
校正：土屋隆
２００８年2月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。